地方教会で行われる特別聖年の閉幕式

2016 年 11 月 13 日（年間第 33 主日）

はじめに

以下の「地方教会で行われる特別聖年の閉幕式」の指示は、ローマ典礼様式の諸教会とローマ典礼様式ではない他の西方の諸教会に関するものである。後者の権限ある権威者は、自分たちに固有の文化に適応させるために式を変更することができる。

東方諸教会の司牧者は、望むなら、それぞれの典礼の伝統に合わせて指示を出す。

日程

1　大勅書『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔』の中で、教皇フランシスコは、聖年は 2016 年 11 月 20 日、王であるキリストの祭日にバチカンの聖ペトロ大聖堂の聖年の扉を閉じることによって閉幕すると定めた。地方教会では、それに先立つ 11 月 13 日、年間第 33 主日に、聖年が閉幕することになる。

場所

2　地方教会では、聖年の閉幕のためにカテドラルでただ一度の感謝の祭儀を行うこととする。

いつくしみの扉の場所として教区司教によって定められた他の教会堂と巡礼所では、司教が任命した司祭が司式して、感謝のためのミサをささげることとする。

司式者

3　その日の特徴と教会の伝統から、司教が祭儀全体を司式することが最もふさわしい。司祭たち、とりわけ司教の近くで働く司祭は、司教と共同司式する。助祭、ならびに祭壇奉仕者と朗読奉仕者は、それぞれの務めを果たす。また、信者はできるかぎり参加するよう強く勧められる。閉幕式が准カテドラルで同時に行われるなら、司教が任命した司祭が准カテドラルでの祭儀を司式する。

感謝の祭儀

4　特別聖年を閉じるミサは、本質的に主日の感謝の祭儀である。司教がふさわしいと判断するなら、ローマ・ミサ典礼書の種々の機会のためのミサの、神に感謝をささげるミサを用いることができる。聖書朗読はＣ年・年間第 33 主日に指定されている箇所を用いる。

感謝の表明

5　拝領祈願の後、司教は典礼祭儀と調和した方法で、聖年の間に受けた恵みを神に感謝

し、この感謝の祈りに加わるよう一同を招く。教会が共有するおとめマリアの感謝の歌であれば、「マリアの歌（マニフィカト）」を歌うのがとくにふさわしい。

開祭

6　年間第 33 主日の定められた時刻に、信者はカテドラルに集まる。

7　会衆が集まると、司教、共同司式司祭、助祭は緑の祭服を着用し、入堂行列を始める。聖歌隊と会衆はともに特別聖年の公式賛歌を歌う。

8　司教は祭壇に表敬してから、席に向かう。それから、以下のことばで一同にあいさつする。

司教　父と子と聖霊のみ名によって。

会衆は答える。

会衆　アーメン。

続いて会衆に向かってあいさつする。

司教　御父のいつくしみ、主イエス・キリストの平和、
聖霊の交わりが皆さんとともに。

会衆は答える。

会衆　また司祭とともに。

9　司教は、たとえば次のようなことばで一同を祭儀に招く。

司教　愛する皆さん、わたしたちは聖年の終わりを迎えています。聖年は、恵みといつくしみの特別な時でした。この感謝の祭儀の中で、御父がわたしたちに与えてくださったあらゆるたまもののために賛美と感謝の賛歌をささげ、御父をほめたたえます。この聖なる神秘に近づく前に、わたしたちが罪びとであることを認め、心から互いにゆるし合い、いつくしみをもたらす慰めの香油をあらためて願い求めましょう。

10　しばらく沈黙のうちに祈った後、助祭または他の奉仕者が以下の嘆願を唱えるか歌う。

助祭　祭壇に近づく前に互いにゆるし合うようお命じになった、主よ、あわれみたまえ。
一同　主よ、あわれみたまえ。　　または　　キリエ・エレイソン。
助祭　十字架の上で、罪びとのために御父のいつくしみを願ってくださった、キリスト、あわれみたまえ。
一同　キリスト、あわれみたまえ。　　または　　キリエ・エレイソン。

助祭　教会に和解の務めをおゆだねになった、主よ、あわれみたまえ。
一同　主よ、あわれみたまえ。　　または　　キリエ・エレイソン。

11　司教は次のことばで結ぶ。

司教　全能の神がわたしたちをいつくしみ、罪をゆるし、
　　永遠のいのちに導いてくださいますように。
一同　アーメン。

12　栄光の賛歌を歌い、ミサを通常どおり続ける。

閉祭

13　拝領祈願の後、司教は、聖年の間に神が与えてくださったあらゆる霊的たまもののために感謝をささげるよう一同を招く。司教はたとえば次のような言葉を述べる。

司教　皆さん、主イエス・キリストの父である神に、喜びのうちに感謝をささげましょう。
　　この恵みの年を通して、神はキリストのうちに天からのあらゆる祝福を授けてくださいました。神は、いつくしみと回心のかけがえのない時を与えてくださいました。
　　わたしたちの母であるおとめマリアのことばによって、わたしたちの感謝と喜びを表しましょう。あらゆる世代に広がる神のいつくしみを歌うとき、同じいつくしみを、尽きることなく全世界の上に、朝の露のように注いでくださるよう神に願い求めましょう。

14　司教と会衆は「マリアの歌（マニフィカト）」を歌う。

15　歌が終わると助祭が言う。

助祭　祝福を受けるために頭を下げましょう。

16　続いて、司教は両手を会衆のほうに伸べて、以下の祈りを唱える（「ローマ・ミサ典礼書」年間第 18 主日の集会祈願参照）。

司教　すべてを治められる神よ、
　　わたしたちにいつくしみを注ぎ、
　　牧者であり導き手であるあなたに祈り求める民を助けてください。
　　あなたの似姿に造られた人々が救いの恵みを受け、
　　新しいいのちのうちに歩むことができますように。
　　わたしたちの主イエス・キリストによって。
一同　アーメン。
司教　全能の神、父と ＋ 子 と ＋ 聖霊の ＋ 祝福が、
　　皆さんの上にいつまでもありますように。
一同　アーメン。

17　祝福の後、助祭は通常どおり派遣のことばを告げる。ふさわしいと思われるなら、次のように言う。「天の御父がいつくしみ深いように、いつくしみ深いものとなりなさい。行きましょう、主の平和のうちに」。会衆は「神に感謝」と唱える。そして、一同は神に賛美と感謝をささげながら解散する。